

# 所報

愛知東邦大学地域創造研究所

2013.3 No.18



## 地域の目を忘れるな

地域創造研究所長  
愛知東邦大学 人間学部教授  
御園慎一郎



政権が交代した。昨年末に行われた総選挙、突然の解散でもあり第三極と言われた諸政党の連携の枠組みがしっかりと構築されないまま投票日を迎えてしまった感は否めない。その結果、政党間の連携の形を十分咀嚼することができないまま一票を投じた有権者も多かったのではないだろうか。選挙による国民の選択は自民党の政権奪還。三年半前に歴史的な大勝利で政権交代を成し遂げた民主党は大惨敗という結果に終わった。そんな中、選挙戦を通じての政策の論点はさまざまであったが、マスコミでは「景気対策」「原発対策」そして「TPP、尖閣竹島という外交問題」の三点がクローズアップされていたように思う。

遡って三年半前総選挙の時なにが訴えられていたかを思い起こしてみよう。この時政権交代を目指した民主党のマニフェストには「地域主権」が高々とうたいあげられていた。かたや自民党は道州制を打ち出していたが、これも地域主体の国作りを標榜したものだった。この時点では時に地域というものの持つ社会的、政治的意味がさらに大きくなるのではという期待も持たれていたと思う。

さて、その結果はというと民主党政権は到底地域のことに全力で取り組んだとは言えないし、地域の心や目を大切にしたとも言えない。政権運営のさなかに東日本大震災が発生したが、こ

の被災地の復旧こそまさに地域主導で国土作りをするのに一番ふさわしい舞台だと言えるだろう。しかしながら被災地東北で地域の力の結集を国がサポートし力強く復興の槌音が響いているという声は聞くことができない。地域主権が掛け声倒れになってしまったということなのだろうか。とても残念だとしか言い様がない。

今回の総選挙でみると自民党の政策の4つの大きな柱の中に地方という文字は見当たらなかった。民主党の5つの重点政策も同様。地方政党から出発した日本維新の会の「維新八策」には「地方分権国家」「内政は地方・都市の自主的経営に任せる」などの理念がうたわれていたが、太陽の党との合流後の公約5本柱からは地域・地方という文字は消えていた。

新政権は景気、外交とスピード感を持った対応をしているように感じられる。今の日本社会の閉塞感を打開し力強い歩みを取り戻すには大胆な施策展開は不可欠だ。とはいえ、復興事業にしる景気対策事業にしる実際の事業を展開するのは地方、地域の人であり企業であり組織だ。政策の柱に「地方・地域」が入ってなかったにしても、新しい政権が自分よがりでなく、我が国を形成しているそれぞれの地域の思い、地域の目を置き去りにしないで国家の運営に携わるように強く望みたい。

## contents

【巻頭言】	「地域の目を忘れるな」 御園慎一郎……………1
【部会報告】	「スポーツプロモーション部会報告」 長谷川望・大勝志津穂……………2
【定例研究会報告】	「江戸時代の子育てを現代に生かす」 古市久子……………3
【震災関連研究会報告】	「『東日本大震災』と地域を考える」 御園慎一郎……………4
【大学祭写真展】	「大学祭で東日本大震災被災地写真展開催」 森靖雄……………5
【11月公演会報告】	「地球のステージ公演!」 宗貞秀紀……………6
【書籍紹介】	「地域創造研究所の近著2冊」……………7
【地域の話題】	「今年も大成功!“納涼音楽祭”」 磯部由美子……………8
【地域創造研究所 2012年度の主な活動】	……………8

# スポーツプロモーション部会報告

スポーツプロモーション部会  
愛知東邦大学 人間学部准教授  
長谷川 望  
愛知東邦大学 経営学部講師  
大勝志津穂

本部会では、「女子スポーツを通じた地域スポーツ振興に関する研究」をテーマに、文献研究やインタビュー調査を実施してきました。2012年度の活動の1つとして、「女子サッカーをキーワードにした地域スポーツ振興の取組み」というテーマで講演会を開催しました。講演会では、NPO法人伊賀FCくノ一統括部長の山村清氏と、REGISTA有限責任事業組合代表の谷塚哲氏を招聘して開催しました。NPO法人伊賀FCくノ一は、東海地域唯一のなでしこリーグ所属チームであり、本研究部会の調査対象チームでもあります。NPO法人伊賀FCくノ一は、1976年創部のクラブチームである「伊賀上野くノ一サッカークラブ」が母体となっています。そして、1988年からブリマハムがスポンサーとなり実業団チームとして「ブリマハムFCくノ一」として、日本女子サッカーリーグ（現なでしこリーグ）に第1回大会から参加し1999年まで実業団チームとして活動していた名門クラブです。その後、スポンサーの撤退により市民クラブ組織として「伊賀フットボールクラブくノ一」を設立し地域に密着したチーム運営と戦力強化を目的に活動を行うという特徴をもったチームです。山村氏にはそのような経緯を持つ伊賀フットボールクラブくノ一が

NPO法人格取得し、新たなスタートを切り、活動をしている現状と今後の課題、展望等についてお話を頂きました。同クラブの活動資金は、グッズ販売、ファンクラブ及び企業会員の寄付により賄われて

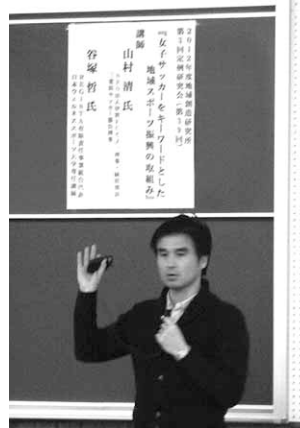
いるそうです。そのため、チームスタッフを中心にスポンサー企業の開拓や個人会員を増やすために足を運び直接お願いをするといった地道な活動をしています。地域から応援してもらえるチームになるために、選手が市民マラソン大会、スポンサーイベント、ファン感謝デーなどに参加したり、サッカー教室などを開催するなどし、地域貢献をしています。また、地域との連携においては、地元のコンビニエンスストアとコラボレーションして「くノ一おにぎり」を期間限定で15万食販売するなどにも取り組んでいます。



NPO法人伊賀FCくノ一統括部長  
山村 清氏

今後の展望としては、2013年度からなでしこリーグが有料試合になることから、いかにファンにスタンドに観戦に来てもらえるかがカギとなってきます。2011年の年間平均観客動員数が200人であったのに対し、W杯後の2012年の平均は800人と4倍に増加しているそうです。そのため、その層が有料試合になっても応援に来てもらえるような試合をすること、地域に愛されるチームになれるように日頃の取組みをすることが重要となります。

谷塚哲氏は、これまで数多くのNPO法人や総合型地域スポーツクラブの立ち上げに関わって来られました。これらの経験を踏まえて、講演会では、大学と地域スポーツクラブの連携についてお話を頂きました。講話では、「地域」「スポーツ」「教育」の3本柱が必要であり、大学がそれらを結びつける役割を担うことができると述べられた。その3本柱を結びつけることは、地域社会とのコミュニティづくりであり、学生の社会教育の場、シルバー世代の再教育の場であり、大学と地方自治体や地元のスポーツクラブが共存し連携する場でもあります。そのような大学を中心とした総合型地域スポーツクラブの存在は今後さらに重要となることを示唆しました。



REGISTA有限責任事業組合代表  
谷塚 哲氏

愛知東邦大学の教育目的には、地域社会の発展に貢献しうる有為な人材を育成することとあります。それを具現化するために総合型地域スポーツクラブあるいは総合型地域クラブの仕組みは、大学として地域

の人々の健康な暮らしを支えることとなり、実のある学生教育につながると考えられます。今回スポーツプロモーション部会企画の講演会を通して、部会の研究テーマを愛知東邦大学として、本学の資源を生かしつつ、何ができるかを考える貴重な機会となりました。今後は、種々の事例についてインタビュー調査を行い、本学ならではの取組みについて考えていきたいです。

# 「江戸時代の子育てを現代に生かす」

—江戸時代の育児書からみた子育て—

名東の寺子屋研究部会主査  
愛知東邦大学 人間学部教授  
古市久子

名東の寺子屋研究部会では2012年6月21日(木)18:00~19:30、A棟104教室にて、定例研究会を行いました。今、日本の社会は教育の問題で悩んでいます、それを解決するべく、江戸時代の教育にその答えを求めた『江戸時代の子育てを現代に生かす(唯学書房2012)』の中から「江戸時代の育児書からみた子育て」について報告を行いました。その概要は以下の通りです。



連鶴の色々

## I 江戸時代の子育て事情

### 1 江戸時代の特徴は？

共同体の結びつきの強さ、日本人の子どもは可愛いがられたが、行き過ぎを「姑息の愛」「舐慣の愛」「禽慣の愛」としていさめた、教育の元になった『小学』、父親の子育て参加の必要性が大、社会的事情を背景に間引きがあった。

### 2 おびたしい育児書が出されたのはなぜか？

江戸時代は「子育て書の時代」と言われる。その理由は中世的伝統に基づく人間形成論が求められたこと、家訓を子孫に伝える課題意識があったこと、家訓は武家だけでなく一般家庭まで広がっていったこと、それは士農工商の四民それぞれの対象にまで広がっていったことなどである。

### 3 父親の育児参加が必須であったのはなぜか？

江戸時代の子育てを紐解く有効な2冊の本『桑名日記』『柏崎日記』がある。これら2冊は父親が祖父と交換日記として互いに書き送ったもので、そこに子育ての様子を読み取ることができる。家の継承を大きな価値と考える社会では、子育ては公ごとであり、女をよく訓練してよき子育てをすることが、家の最高責任者たる男の責任であると考えられていた。

### 4 心の豊かさにあふれた時代であった理由？

日々の暮らしや折々の行事に見られる家族の関わり、遊びにおいても手作りのおもちゃを親と一緒に楽しむなど、表現力・創造力を育てる教育の機会が多く存在した。

## II 現代に生かすこと

**教育哲学:**現代のように「前に立って引っ張る教育」ではなく、「後ろから追いたてまた突き出す」という見守る教育

**家庭教育へのヒント:**子孫が行動するやり方へのメッセージが、親の行動として「目からの教育」として、無理なく確実に伝えられたこと。

**教育理念の徹底:**いろはかるたをはじめ、狂歌やリズムカルな口調の教えが、子どもの身体に吸収され、行動基準になっていったこと。例えば「のらのらと後よ明日と怠れば後には水も飲めぬ身となる」というかるたがある。

**循環思想:**江戸文化の本質は循環に価値観があり、これは物的なことだけではなく、心のゆとりにも影響した。例えば、自分の行動が子どもに循環して伝えられていくことや、仕事は自分のためだけではなく、社会全体が潤うことで自分に帰ってくるなどである。以上、心の豊かさを取り戻し、知恵を育てるヒントにあふれていることを紹介した。

## III 連鶴と双六

研究発表以外に、江戸時代に出版された『秘伝千羽鶴折形(吉野屋為八 版元 1979)』の本を参考に作った妹背山・鳴子・八橋などの折鶴を見てもらいました。参加者の中で実際に和紙を使って大変器用に八橋を作られた方がおられて、驚きました。また、当時の女性の姿を描いた双六「娘庭訓出世雙六」を楽しんでもらいました。

多くの方々が熱心に聴いてくださり、心より感謝申し上げたことでした。



研究会の様子



# 「東日本大震災」と地域を考える

地域創造研究所長  
愛知東邦大学 人間学部教授  
御園慎一郎



東日本大震災が起こってから2年の月日が過ぎようとしています。

今回東北の皆さんに起こったことは何も特別なことではありません。本来我が国は災害大国であり、過去の歴史を紐解けば日本の各地で多くの巨大地震による被害が記録されています。我々の暮らす東海地域も、東海、東南海、南海地震やこれらの連動型地震がごく近い将来に発生することがほぼ確実視されています。

地域創造研究所としては、地域の皆さんが安全に生活できることが地域づくりの出発点だという考え方のもとに昨年度から震災と地域社会について考える研究会を開催してきました。

## 昨年度の研究会の状況

昨年度は東日本大震災を踏まえて被災地の実態から学ぶということを基本に研究会の名称も『「東日本大震災」研究会』として四回開催しました。

第一回目は5月に災害直後に現地入りした名古屋市消防局のレスキュー隊長を講師としてお招きし被災現場での救援捜索活動の実態を伝えてもらいました。

第二回目は7月に被災地支援ボランティアのNPO法人レスキューストックヤードの代表に講師として来ていただきました。そして現地での悲惨な実例や精神的ケアの大切さと難しさを教えてもらいました。

第三回目は10月に愛知東邦大学と東邦高校の教職員と学生、生徒で被災地支援の現地ボランティアに参加した皆さんの報告会を行いました。

第四回目は2月にまとめ的な意味も兼ねて防災の専門家である工学院大学の三好勝則教授に「減災のためのちいきづくり」と題して基調講演をしてもらいそれに続いて三好教授と愛知県防災局災害対策課主幹原田信一氏、名古屋市消防局防災室長木全誠氏、地元のコミュニティーで防災の担当をしておられる佐藤弘氏で住民としての日頃の備えということについてパネルディスカッションを行いました。

## 本年度の研究会

二年目となった本年度の研究会は研究テーマを災害時における「減災」に重点を置くこととし、名称も「減災研究会」に変更いたしました。

そして地元名東区を対象に名古屋市消防局の全面的な協力のもとに実施しました。

今年度の研究会の特徴として大学と行政とのコラボレーションが実現していることが挙げられます。このような取り組みは今後の大学の地域貢献活動のあるべき方向を示すものと言えるでしょう。そして特徴の二つ目は、大学が所在する地

域を研究対象としていることです。この研究が出发点となって大学発の地域づくりの輪が広がることが期待されています。

第一回目の研究会は7月21日に「地域の成り立ちを知り、防災力を高めよう～南海トラフ巨大地震に備えるために～」と題した名古屋市消防局防災室長木全誠一氏の講演でした。

講演では日本を取り囲むプレートの動きから始まり現在の愛知県、そして名東区の地盤が形成されてきた歴史的推移や名古屋市域に影響のあった巨大地震の歴史、名東区地域の都市開発の歴史などが説明されその中で地震の際の備えについてたくさんの示唆にとんだ指摘がなされました。これは第二回目のフィールドワークの事前学習にもなっています。

第二回目は11月10日、「街を歩いて、身近な地域の成り立ちを知り、防災力を高めよう」がテーマでした。名古屋市消防局防災室長木全誠一氏、防災室主査吉田博氏、防災室主査西尾未来氏の三人に参加していただきマイクロバス二台に分乗してのフィールドワークです。バスは、和示良神社―猪子石神社―大石神社と周り、その後平和公園内のアクワタワーから名東区を俯瞰し合わせて榎廻間池跡も確認しました。それぞれのポイントでバスを下車し説明を受けたことでこれまであまり意識していなかった地形の高低差、香流川の流域が時代によって変化してきたこと、遊水地の配置状況、都市開発の際の切土、盛土による地盤の強度、ため池埋立地の利用形態、土砂災害の状況など防災の観点から地形をどのようにとらえるかということ学びました。

第三回は「皆で話し合い、身近な地域の防災力を高め、災害による被害を減らそう」をテーマに、第二回のフィールドワークを踏まえ他ワークショップを開催しました。第三回にももちろん名古屋市消防局の皆さんの参加を頂いた上で東邦学園関係者と地域の皆さんとで減災に向けた充実した話し合いがなされました。

本研究所としては今年度の「減災研究会」の成果を踏まえて地域の皆様と連携したより良い地域づくりのための検討と提言、そしてそれに基づいた活動を行っていくこととしています。



第1回「地域減災」研究会



第2回「地域減災」研究会

# 大学祭で東日本大震災被災地写真展開催

愛知東邦大学  
地域創造研究所顧問  
森 靖雄

2012年11月17・18両日、愛知東邦大学大学祭(和丘祭)行事の一環として当研究所も協力する東日本大震災被災地写真展「遠い日にしない あの時」を開催しました。主催は研究所長御園先生のゼミ。2年生が中心になりこれに、大学生協や宗貞ゼミ、手嶋ゼミ、ボランティアサークルなどが協力しました。展示した写真は、最小60×80cm、最大50×420cmという大型パネル約60枚の組写真です。展示構成や被災地紹介資料は御園ゼミの学生諸君が担当し、それに大学生協の学生委員たちが協力しました。

展示はA-205教室の壁ぎわや白板を並べたボードを使って立体的に飾られました。17日はこれに大学生の災害支援ボランティア関係のパネルも追加され、大変賑やかな展示になりました。この会場では両日とも約2時間ずつ、関連するイベントもおこなわれました。



宮城県気仙沼市住宅地域の被災状況(2011.4.20.撮)

### 初日は大学生協の活動紹介

16日には大学生協の学生委員たちが「大学生協で受けられるサービス」「ピースナウ長崎 原爆学習ツアー報告」「東日本大震災被災者支援ボランティア報告」を柱に、報告会を開催しました。これには宗貞ゼミ・手嶋ゼミ・ボランティアサークルからも参加し、報告しました。

長崎への学生派遣では学内の募金活動で費用の約8割が集まり、残りは生協の支援を受けました。現地では「原爆語り部」の話や被災地見学に参加したことが報告されました。

被災地支援ボランティアでは、本学から大学生協の募集に応じた学生が全国で7番目に多かったことや、現地で携わったさまざまな仕事について報告がおこなわれ、ボランティアの多様な実態が浮き彫りになりました。

### 二日目は震災現場の現状説明会

17日は御園ゼミによる被災地の現状学習会。撮影者である私が現地の状況を説明し、質問を受ける形で進行了。マスコミで報道される「復興」とはほど遠い現地の状況や被災地での暮らし、ボランティアの役割など、多彩な質問が出ました。



当日の展示風景



仙台市宮城野区南部の被災地(2011.4.19.撮)



宮城県亶理町市街地に漂着した漁船(2011.4.19.撮)



# 地球のステージ公演!

—「放浪篇・フィリピン篇」+震災篇—



愛知東邦大学 人間学部教授  
宗貞秀紀



地域創造研究所では、秋の講演会を例年開いて来ていましたが、地域と共に歩む実践大学のプログラムとして、本年度は地域の皆さんを対象とした公演会を開催いたしました。2012年11月25日(日)、本学103号教室において盛会裏に「地球のステージ」初演を開催いたしました。御園地域創造研究所所長より演者の桑山紀彦先生を紹介され、ダウンライトの中で始まりました。教室は立見席が出るなどにより、演者の桑山先生から、「防災の関係上、階段にお立ちの方は、席を譲り合ってください。どうか、階段にお座りいただくか、是非ご協力をお願いします」と呼びかけていただきながらの公演会でした。

**演者は。**宮城県名取市閑上(ゆりあげ)地区在住。東北国際クリニック院長(精神科医・医学博士)、NPO法人「地球のステージ」代表理事。国内で医師として診療を行う一方、パレスチナや東ティモール、カンボジア、地震などの被災地での国際医療支援活動、「地球のステージ」公演などで地球を生きるステージとして幅広く活動されている先生です。

2011年の3.11による地震・津波災害にも遇われました。自身は、地方での「地球のステージ公演」中でしたので、直接被害はなかったのですが、名取市の閑上(ゆりあげ)には大津波が押し寄せ、2,600世帯が生活し、約6,500人が暮らしていた住居をなぎ倒して全壊し、900人もの犠牲者が出た地域です。

同地域に4ヶ所の病院がありましたが、いずれも津波で全壊・半壊等で開院できず、桑山先生のクリニックは床上40cmだけでしたので、水はけ後になんとか開院し、翌日からは不眠不休の被災者支援活動を続けられています。

**どんな公演会!** 最初は「地球のステージ」公演会って何?となります。「地球のステージ」は、桑山医師自身が、57カ国でさまざまな人々と触れ合いながら自ら体験してきたこと(紛争地区、貧困地区、災害地区、途上国の放浪と支援活動)を、音楽・映像・語りで組み上げる映像と音楽のシンクロステージです。「本当の豊かさって?」「生きる意味って?」「このような世界があるの?」、心が揺さぶられる公演ステージです。桑山先生自らが記録したとても素晴らしい映像と語り、そして、作詞作曲したオリジナルの曲を、ギターとバイオリンを匠に弾きこなし、その詩と歌が映像の内容とタイアップしていきます。

**具体的な内容は!** 見て、聴いて理解するものでもありません。自然と「心に響き、心で感じる」ステージです。「地球のステージ」は、第1部～第6部まで用意されていますが、3.11震災後は、各ステージに震災篇、復興篇、未来篇をプラスαして公演されています。1部は、フィリピンやソマリア、東ティモール、ガザ地区への放浪の旅と支援活動を通じて人との出会いが中心です。第2部は「国境を越えて」、第3部は「国境なき大地」、第4部は「果てなき帰郷」、第5部は「果てなき地平線」、第6部は「永遠

の帰還」と1部が90分から120分で演じられています。公演会終了後は、質疑応答やワークショップ、トークセッション、先生を囲み語り合う会などが併せて行われます。

**開催要望と感想文!** 本学での「地球のステージ」開催は初めてでした。170名の地域の方や学生も混じって鑑賞・視聴しました。参加者からのアンケートを拝見しましたが、主催者として喜びが溢れる多くの感想文を戴きました。全編のアンケートの紹介が出来ないのが残念ですが、数編を紹介します。内容をお汲み取りください。

『とても感動しました。「失えば 与えられる」のですね。自分に正直に向き合う人間でいたいと強く思いました。これからも戦いが続くようですが、どうぞお体にご留意なされ、多くの人々に感動を届けてください。私も何が出来るのか、そして何をしたいのかを問い続けていこうと思いました。有難うございました。大学の皆さん素晴らしい企画をありがとうございました。』

『大垣日大高校で2回ほど見ています。すごく好きです。また見たいので是非来てください。また、岐阜にも来てくださーいね。』

『桑山さん、今日の話をありがとうございました。世界が広がりました。被災した消防車は是非残していただきたいです。現実から目をそらしてはいけない時もアルと思いながら生きているのでそう思いました。』

『地球のステージ続篇を継続的に開催してください。是非とも地域への一般公開で開催してください。』

『実に素晴らしい公演会でした。近々パート2をお願いします。次回は孫を連れて参加しますので。』

『今まで、3.11震災の映像は何度も見っていますが、今日ほどジーンと来たことはありませんでした。政府のやり方に不満を抱いているばかりではなく、自分にやれることを少しでもやっていくことを、改めて教えてもらいました。桑山さんの活動を知って良かったです。ありがとうございました。』

『10年ほど前に、ウィルあいちで「地球のステージ」を拝見し、今回桑山先生の軌跡を見せていただきました。日常の中にある今、必要な事に見過ごさないように頑張りたいと思いました。これからも頑張ってください。どこかでお会いしたいです。東邦大学でまた公演をお願い致します。』

**20周年に向けて!** 1996年1月15日に、桑山先生は第1回のステージ公演を開かれています。今は、1月で17周年を迎えます。月、木と診察・診療医師活動、合間をみて、年間200～250回の全国でのステージ公演。春夏秋冬の各一週間は海外医療支援活動と多忙な活動です。既に、累計2700回のステージを通過していますが、当面、20周年を目標に前進されることを期待しています。

## 地域創造研究所の近著2冊

## 地域創造研究叢書No.17

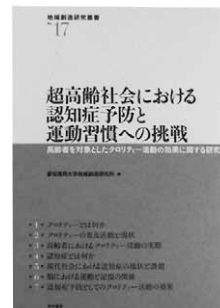
『超高齢社会における認知症予防と運動習慣への挑戦  
～高齢者を対象としたクロリティー活動の効果に関する研究～』  
(唯学書房 2012.3.31)

また、実地調査については、豊田市をはじめ、瀬戸市、犬山市、大府市と島根県松江市などで行った。そして、これらで得た研究成果を、日本教育医学会(名古屋市立大学)や日本認知症ケア学会(鳥取県米子市)などで7回の研究発表を行った。さらに、『東邦学誌』(第39巻第2号、第40巻第1号)に論文として著し発表した。

このたび、本研究部会として従来から行ってきた研究成果を、地域創造研究所叢No.17してまとめる機会を得たので、以下の通り分担執筆し叢書として著したので、その内容を紹介する。

叢書のタイトルは、『超高齢社会における認知症予防と運動習慣への挑戦－高齢者を対象としたクロリティー活動の効果に関する研究－』として、第1章では、クロリティーとは何かについて解説した。第2章では、クロリティーの普及活動と現状として、日本におけるクロリティー普及の現状を日本地図に図示して、その活動状況を紹介した。第3章では、高齢者におけるクロリティー活動の実際として高齢化率の高い代表的な島根県と比較的高齢化率が低い愛知県を取り上げ、地域における活動の特徴について紹介した。第4章では、認知症とは何かについて分かりやすく解説した。また、第5章では、現代社会における認知症の現状と課題についてふれた。第6章では、脳における運動と記憶の関係について簡単に紹介した。そして、第7章では、認知症予防としてのクロリティー活動の効果として6編の研究成果をそれぞれ考察し掲載した。さらに、これまでの基礎的研究から得られた知見とクロリティー活動のススメとしてまとめ著したものである。

最後に本著作が、これからの日本社会での今日的課題である、認知症予防活動の一助となれば幸いである。



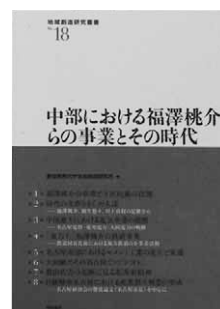
## 地域創造研究叢書No.18

『中部における福澤桃介らの事業とその時代』  
(唯学書房 2012.9.1)

初めまで再三名古屋を訪れて、木曾川水系に4つの発電所を建設し、その電力を使うため電車の敷設やハガネ、セメント、ソーダなどの製造事業を次々と立ち上げた。本人は東京と名古屋を往復していたので、名古屋にはそれらの事業を経営する実務者が必要である。これまでの研究で、それが東邦学園創設者でもある下出民義氏であったことが明らかになったので、今回は同時代の名古屋やその周辺地域におけるその他の産業や企業家の動きにメスを入れた研究である。

各章の表題を掲げてその内容を紹介すると、本書は次のような構成である。「1 福澤桃介の事業と下出民義の役割」「2 時代の先取りをした人達－福澤桃介、桐生悠々、川上貞奴の足跡から」「3 中部における電気事業の展開－名古屋電灯、東邦電力、大同電力の軌跡」「4『電力王』福澤桃介の鉄道事業－鉄道国有化後における地方鉄道の企業者活動」「5 名古屋南部におけるセメント工業の成立と変遷」「6 矢田碩とその名古屋での『シゴト』」「7 豊田佐吉の足跡に見る起業家精神」「8 日露戦後名古屋における産業都市構想の形成－名古屋経済会の懸賞論文『名古屋市是』を中心に－」。今回の報告書によって、「ものづくり愛知」の産業基盤形成期における産業界の動向の一端が明らかになったと思われる。

当研究所の中部産業史研究部会が、2011・12 両年度にわたって研究会を重ねてきた成果を標記の表題の報告書に取りまとめた。「電力王」と呼ばれた福澤桃介氏は1910年前後から30年代





# 今年も大成功!“納涼音楽祭”

東邦学園 理事  
磯部由美子

8月25日(土)夕闇の中、東邦学園主催「行く夏を惜しむ納涼音楽祭」が開催されました。

今年で第3回を数えるこの催しは、既に地域の方々の楽しみの場となっているようで、来校された方々は、「今年も来ました」「期待しています」などの嬉しい言葉とともに東邦高校正門より入ってみました。

オープニングは、愛知東邦大学子ども発達学科学生有志による子ども向け企画。プログラムは子どもへの思いや工夫に溢れ、おおはしゃぎの子どもたちの姿が印象的でした。続いては、地元のフラダンス教室の方々によるフラダンス。あでやかな衣装と、柔らかいけれどしっかりと腰を落としてのダンスは、見る者の目をひきつけて離しません。続いての登場は、愛知東邦大学吹奏楽団。部員数も増え、温かく優しい演奏に迫力も加わりました。さすが大学生です。続きまして、故郷踊りの会の方々です。人数は多くありませんが、重厚で優美な踊りはプロ顔負け。そして、お次は地元の豊薔舎平和が丘教室の方々による盆踊り。日頃は、なかなか参加する機会の少なくなった盆踊りですが、飛び入り参加の方々も交えての総踊りは壮観です。プログラムの最後を飾るのは、皆さんお楽しみの東邦高校吹奏楽部の演奏です。何度も全国大会・東海大会に出場しているクラブなだけに、聴き応え見応えは十分です。予定されている時間



納涼音楽祭を楽しむ子どもたち

があつという間に過ぎ、参加者の拍手がなりやみません。

さあ、いよいよ花火です。小さな子どもたちが目をこすりながら待っています。昨年以上にパワーアップした今年の花火の目玉は「ひまわり」。子どもたちの歓声と大人の息をのむ様子は、火の粉を浴びながら花火を手にするスタッフへの最高のねぎらいです。

今年は、正門付近を飾った風鈴が帰られる子どもたちに配られ、帰宅されてからも家族で余韻を楽しんでいたただけたことでしょう。参加された400名の方々からいただいたアンケートでは、「大変満足」71.5%、「満足」26.3%と、これまで以上の評価をいただきました。「楽しかった」「来年も期待しています」「来年もお願いします」の声に応えられるよう、これからも続けて企画していきたいと思います。

## 地域創造研究所

## 2012年度の主な活動

- 2012年 5月 25日 第37回研究会「デュアルシステム(ドイツの職業教育制度)と人材育成の取り組みー飛騨高山における実践例をもとにー」  
(主催 人材育成研究部会、報告 野添雅義氏)
- 2012年 5月 30日 地域創造研究所第12回総会
- 2012年 6月 21日 第38回研究会「江戸時代の子育てを現代に生かす」(主催 名東の寺子屋研究部会、報告 古市久子氏)
- 2012年 7月 21日 第1回「地域減災」研究会／後援:名東区役所(於:愛知東邦大学)
- 2012年 9月 1日 研究所叢書No.18『中部における福澤桃介らの事業とその時代』刊行
- 2012年11月 10日 第2回「地域減災」研究会／後援:名東区役所(於:愛知東邦大学・名東区街歩き)
- 2012年11月 25日 第11回講演会(公演会)「『地球のステージ1』&震災篇」(於:愛知東邦大学)
- 2013年 1月 15日 第39回研究会「女子サッカーをキーワードとした地域スポーツ振興の取組み」(主催 スポーツプロモーション部会、報告 山村清氏、谷塚哲氏)
- 2013年 2月 9日 第3回「地域減災」研究会／後援:名東区役所、共催:名東カルチャーゾーン構想(於:愛知東邦大学)
- 2013年 3月 13日 研究所所報No.18発行
- 2013年 3月 14日 研究所叢書No.19『東日本大震災と被災者支援活動』刊行

※その他、各研究部会主催による研究会等多数

## 学校法人 東邦学園

愛知東邦大学 経営学部 人間学部  
東邦高等学校 普通科・商業科・美術科

所報 NO.18 2013年3月13日  
発行・編集 愛知東邦大学地域創造研究所  
〒465-8515  
名古屋市中東区平和が丘三丁目11番地

TEL (052)782-1241 FAX (052)781-0931  
URL <http://www.aichi-toho.ac.jp>  
E-mail [kenkyujo@aichi-toho.ac.jp](mailto:kenkyujo@aichi-toho.ac.jp)